

【教育振興支援助成報告】

家政学部学生の「和洋ショップ」経営プロジェクト

平成 28 (2016) ～ 30 (2018) 年度和洋女子大学教育振興支援助成報告

湊久美子、嶋根歌子、塚本和子、向井加寿子、伊藤瑞香、織田奈緒子、藤澤由美子
登坂三紀夫、大河原悦子、庄司妃佐、佐藤宏子、大石恭子、柴田優子、柳澤幸江

“WAYO SHOP” Management Project in students of Human Ecology

MINATO Kumiko, SHIMANE Utako, TSUKAMOTO Kazuko, MUKAI Kazuko,
ITO Mizuka, ORITA Naoko, FUJISAWA Yumiko, TOSAKA Mikio,
OOKAWARA Etsuko, SHOJI Hisa, SATO Hiroko, OHISHI Kyoko,
SHIBATA Yuko, and YANAGISAWA Yukie

要旨

本稿では、2016～2018年度に和洋女子大学教育振興支援助成を受け、家政学部の学生が企画、制作したものを学外で販売する活動を通して学んだ「和洋ショップ」経営プロジェクトの実際と学生の学びの様子を報告した。2016・17年度は、JR市川駅ビルシャポー市川ショッピングセンター内のイベント広場を借用し、「和洋ショップ (Wayo Shop)」を12月初旬に16年度は5日間、17年度は3日間、開店した。商品として、学生が企画制作した手づくりの雑貨類 (布小物・アクセサリ等)、教員が指導して制作した指定商品 (同)、課題商品 (エプロン) と千葉大学と連携して商品化したりんごジャムを販売した。また、子どもとその保護者を対象に、学生指導により子どもが手づくり体験をするワークショップ (16年度)、フェルトで手づくりしたおにぎりやおかずを弁当箱に詰める「お弁当ゲーム」による食育活動 (17年度) を実施した。2018年度は、ホームページ上に店舗を展開するネットショップ「和洋ショップ (Wayo Shop)」を立ち上げ、前年度と同様に揃えた商品を販売した。また、学生は商品を制作するだけでなくショップ運営にも携わり、教員スタッフと連携してショップ経営を体験した。3年間のショップ経営活動により、ものづくりの企画制作、ショップの準備、商品管理から販売まで、様々な問題解決課題に取り組み、PDCAサイクルの実際を、臨場感を持って体験した。その結果、学生は、消費者の視点に立つ考えや自信を持って行動する力を身につけ、「企画力」「実践力」「キャリアマインド」の向上に成果が認められた。今後は、家政学部のプロジェクトとして継続させ、学生教育に活用していくとともに、主に服飾造形学科の学生や卒業生が参加する恒常的なショップ経営と「和洋ブランド」の誕生を目指したい。

キーワード：手づくり品 (handmade goods)、商品企画 (product development)、ショップ経営 (shop management)、地域・企業連携 (university and community/company collaboration)

はじめに

家政学の学びは身近な生活を科学する実践的な学びが主である。そのため、家政学部の学生には生活科学の知識や技術を身につけるだけでなく、その力を実社会や生活の中で活用していく力が求められており、地域や社会の要請に応じて、企画力、実践力などを発揮できる能力を育てることが重要である。このような背景から、プロジェクトでは、地域社会や消費者が必要としている生活の中で活用できる「もの」を企画、制作し、商品として販売して消費者に満足していただく「ショップ」の企画運営の過程を学生が実体験し、実践力を身につけ「ショップ」の経営や運営方法を習得すると同時に、社会へのキャリアマインドを形成させることを目的として運営された。その内容について、3年間に実際に体験した内容を総括し、家政学部の学生と教員の学びの様子を報告する。

取り組み内容

1. ショップの立ち上げ

まずは、大学周辺に「和洋ショップ」の店舗を作って販売することを目標に活動した。その結果、初年度、2年目は、JR市川駅ビルシャポー市川ショッピングセンター内に、12月初旬に「和洋ショップ」を店舗出店した。初年度は、土日を含む5日間、2年目は同様に3日間、毎日10時～21時に開店した。(株)ジェイアール東日本高架サービス(ショッピングセンター建物管理運営会社)と契約してショップの場所(イベント広場)を借用し、(株)ジェイアール東日本都市開発(ショッピングセンター運営会社)の指導により、販売品の内容決定や広報・宣伝活動などを実践した。企業との連携では、主に教員が担当し、間に教員が入って企業とのやりとりは行われた。

一方、ショップの装飾などの店舗づくりは、すべて運営メンバー(後述)の学生のアイディアにより実践された。2017年度は、「大人かわいい」「ナチュラル」なイメージの店舗を目指し、ベージュや淡い緑や黄色、小花柄を主体とした色柄の布を多数使用し、木製柄の台や皿を使い、緑の植物や淡い色紙で作成した花を飾り落ち着いた雰囲気のお店を作りあげた。2年目は、「冬の夜のカフェ」をテーマに店舗づくりを展開し、青色とレースの縁取りを配した白布を使って商品台を覆い、キラキラする星や光をイメージした置物やライト、ガラス皿、白皿などを多用して美しい店舗を設営した。

2018年度は、市川駅ビルの改装工事があり、ショッピングセンターの借用が不可能となったため、ホームページ上でショップを運営する「ネットショップ」を立ち上げた。(株)ビー・アイと契約して「和洋ショップ」のホームページを委託作成し、2018年12月1日から2019年1月7日まで開店した。なお、2016・2017年度のほとんど完売した店舗販売とは異なり、ネットショップでの売上げが伸び悩んだため、11月24日の学内でのオープンキャンパス時と1月23日、24日の日中を利用して、学内(教室)で追加販売を実施した。

2. 商品の企画・制作

初年度は、家政学部学生2～4年生の希望者を募り、はじめに起業経験のある服飾造形学科教員(向井加寿子准教授)による講義を行った。その後、学生がショップの「テーマ」を決め、作って販売する「もの」を考え、企画を募集したところ、45件の企画が提案された。企画書の内容を服飾造形学科教員が評価し、商品化に向けてのアドバイス、指導を行った。主に服飾造形学科の学生が試作を繰り返して改良した結果、商品化が決定し、制作され、納品されたものは、服飾小物などを中心とした雑貨21種類402点と食品1品目(りんごジャム2種類)502個となった。りんごジャムは、2013年度の家政学部教育振興支援助成「農業体験学習事業」での商品開発経験を生かして、千葉大学の環境健康フィールド科学センター

の協力を得て、千葉大学のセンター所属教員・スタッフの指導によりセンター内の食品加工場において学生が手づくりしたジャムに、学生がデザインしたラベルを添付、ラッピングして商品化した。

2年目は、1年目の経験をもとに、初心者でも制作できる指定商品を教員側で定め、教員の指導による手づくり教室に参加した家政福祉学科の学生が、布やフェルト小物、アクセサリなど295点を制作した（Aコース）。また、課題商品として「エプロン」を定め、学生から企画、デザインを募集し、その中から服飾造形学科学生の企画を教員が選考、指導して2種類の「エプロン」と「割烹着」を商品企画し、生地や色柄を学生と教員が相談しながら選定、外部委託による縫製により質の高い商品54点を作り上げた（Cコース）。その他、初年度と同様に、学生が自由に企画デザインしたものから、服飾雑貨16種類120点（Bコース）とりんごジャム2種類501個を商品化した。

3年目も、前年と同様に、指定商品として布、フェルト、毛糸小物、アクセサリなど273点と、学生企画による雑貨9種類110点、教員指導によるアクセサリ3種類44点、りんごジャム2種類520個を商品化した。この年のりんごジャムは、紅玉りんごジャムとアップルシナモンジャムの組合せで2個箱入りを商品化し、箱のラベルデザインも学生が担当した。表1に、3年間の商品制作の概要とその他の販売品の内容を示した。学生の企画、手づくり品の他は、これまでに健康栄養学科が企業との連携により商品開発した菓子などの食品、㈱和洋サービスで販売している和洋マーク入りの食品であった。

表1 ショップと商品の概要

年度	2016年度	2017年度	2018年度
出店場所	JR市川駅 シャポー市川 ショッピングセンター	JR市川駅 シャポー市川 ショッピングセンター	ネットショップ https://wayo-shop.com/
日程	2016/12/1～12/5 5日間	2017/12/1～12/3 3日間	2018/12/1～2019/1/7 38日間
学生企画制作商品BC	布・革小物 刺繍 編み物 デザインTシャツ 402点	布・毛糸小物 レース編み 刺繍・アメリカンフラワー レジン・デザインTシャツ エプロン・割烹着 174点	布・革小物・レジン アメリカンフラワー レース編み ビーズ 154点
学生制作商品A	—	布小物・フェルト小物 レジンアクセサリ295点	布小物・フェルト小物 レジンアクセサリ 273点
千葉大学連携商品 学生製造	りんごジャム 502個	りんごジャム 501個	りんごジャム 520個
企業連携商品	和洋煎餅 米油 わよどら	和洋煎餅 米油 わよどら	和洋煎餅 米油
和洋サービス商品	和洋クッキー	和洋クッキー	和洋クッキー
追加販売	—	—	11/24オープンキャンパス 1/23・24学内

3. ワークショップ

ショップでは、ものを販売するだけでなく、「ものづくり」を子どもたちに体験してもらう「ワークショップ」としてイベント形式を実施した。初年度は、学生からの提案により、簡単な材料と短時間でできる小さな手づくりアクセサリ・クリスマスグッズなどを学生が指導して子どもたちが手づくり体験をした。雑貨の手づくりには主に服飾造形学科と家政福祉学科の学生が取り組むため、2年目は健康栄養学科学生の取り組みやすい内容をワークショップに取り入れ、子どもたちへの食育活動「おべんとうゲーム」を実施した。お弁当箱にフェルトで手づくりしたごはんやおかずを詰めてお弁当を完成させ、学生と親子が食

べ物の話題でコミュニケーションし、バランスの良い食事について指導する食育活動であった。図1にワークショップの内容を示した。

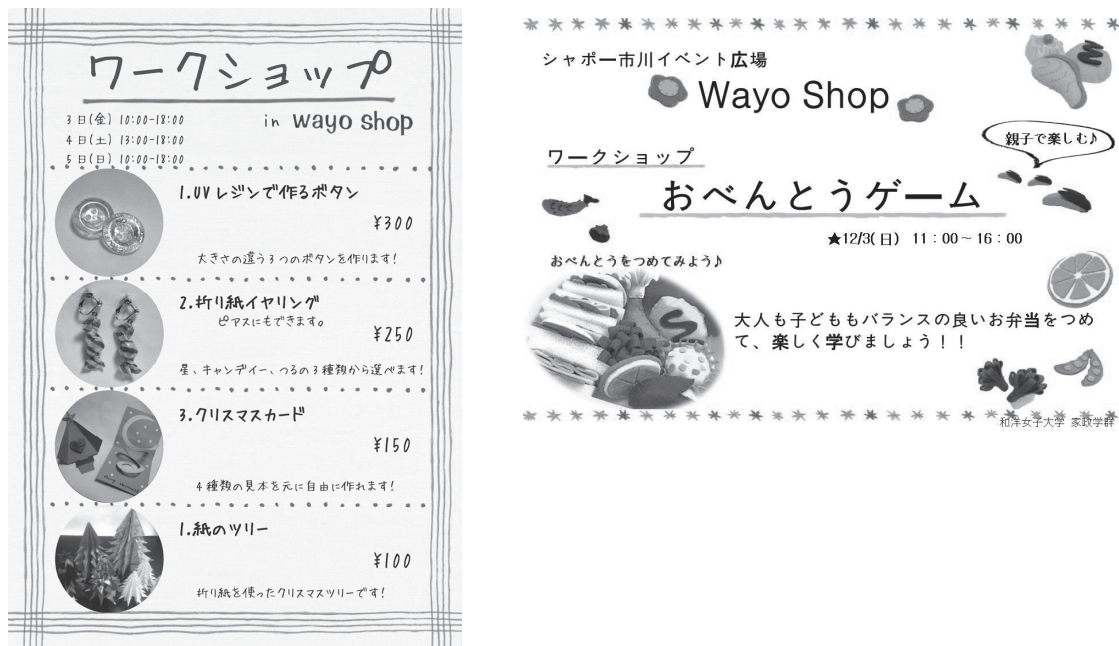


図1 ワークショップの内容

左：2016年度 手づくり体験、右：2017年度 食育ゲーム

4. ショップの運営

学生から「運営メンバー」を募集し、店長、副店長を定め、広報担当（ポスターやチラシ制作）、装飾担当（店舗づくり）、商品管理（袋詰めや価格表示など）、販売担当（店頭販売スタッフ）、シフト作成（販売担当配置）、報告書作成などの担当を分担した。1年目は商品を企画制作した学生が運営も担当した結果、商品の制作、店舗作り、販売準備、販売、ワークショップ担当など、多数の業務を同一学生が担当することとなり、一部の学生では疲弊してしまったことから、2年目は、商品制作者とは別に、運営メンバーやワークショップのスタッフを募り、店長、副店長は、商品制作をしない学生が担当して、良好な運営活動が進められた。

3年目は、ネットショップのために、すべての商品について、写真を撮影し、商品説明をデータ化する準備作業が必要となり、その作業は運営メンバーの学生が主に担当した。ホームページのデザインについては制作会社に教員と学生からのイメージを伝え、制作会社が制作した。商品の写真や説明データの提供など制作会社担当者とのやりとりについては教員が担当した。ネット上での販売方法については制作会社の持つ定型の方法に従った。ネット上で注文が入った後の商品の梱包、発送作業などは学生が担当した。

3年間を通して、ショップの運営、特に連携企業とのやりとりや、商品管理と経理の部分については、学生だけで担当せずに、教員、助手、助手補とともに助成により採用したスタッフ（家政学部卒業生）が担当した。そのため、大きなトラブルが発生することはなかったが、学生の担当部分を増やすことができれば、さらにより体験活動となったかもしれない。一方で、授業やアルバイトなど忙しい学生がそれ以外の活動において担当できる業務量を考えると、妥当な業務配分であったとも考えられた。なお、今回の学生活動は、原則として金銭報酬のない形で運営された。

5. 学生の参加状況

表2に3年間の取り組みに参加した学生数を担当別に示した。重複して役目を担っている学生も多く、実人数にして約150名が参加し、2年連続して参加した学生もいた。参加した全員に参加賞を授与し、年度毎に特に熱心に取り組んだ学生には、取り組んだ内容を示した特別賞を授与した。

表2 参加学生数

	商品企画制作 B:オリジナル商品 C:課題商品 2017:エプロン 2018:ビーズ	商品制作 A:布小物 レジン小物	りんごジャム 製造	ワークショップ 2016:アクセサリ (レジン)制作 2017:子ども食育 (お弁当ゲーム)	運営	販売	参加賞 授与	特別賞 授与
2016 年度	服飾 12名 健康 1名	—	服飾 1名 健康 7名 家福 5名	服飾 11名	服飾 10名 健康 1名 家福 1名	27名	32名	19名
2017 年度	服飾 12名	家福 35名	健康 5名 家福 7名	服飾 2名 健康 10名	服飾 5名 健康 2名 家福 5名	31名	78名	22名
2018 年度	服飾 7名 家福 2名	家福 26名	健康 8名 家福 1名	—	服飾 1名 家福 7名	—	51名	5名

6. 学生の様子

参加した学生からの主な感想は、「人のためのものづくりを初めて体験した」「自分の作ったものを買ってもらえて嬉しい」「消費者を意識したものづくりを考えた」「何度も試作を繰り返して商品化できた」「作業や課題が多すぎた（初年度）」「計画性が必要」「楽しい活動・体験ができた」「大変だったが達成感・満足感が得られた」「自信がついた」「多くの人に支えられた」「他学科の学生や教員と交流できた」「消費者と交流できた」「色々な人に褒められて嬉しい」「消費者の視点や販売者の立場を経験できた」「店舗の装飾を褒められた」「学外からの取材を受け緊張した」などであった。学生は、自分のものづくりが消費者・購買者とつながっていることを実感していた。さらに、学内外の多くの人たちと交流し、褒められたことが達成感や満足感につながっていた。また、すべてが順調に進められたわけではなく、現場で起こる多くの問題解決のために、学生間や教員との長時間の話し合いの経験など、今後の社会生活の中で起こる可能性のある課題に熱心に取り組み、まさに、PDCAサイクルを実体験した。

総括

3年間のショップ経営活動により、学生と教員が連携してものづくりから販売まで、様々な問題解決課題に取り組むことができた。このようなPDCAサイクルを、臨場感をもって体験することにより、学生は「企画力」「実践力」「キャリアマインド」を身につけることができた。授業以外の活動の中で、多くの時間を費やして商品を企画制作し、ショップの運営を担当した学生の努力はすばらしい活動であった。特に、JR市川駅ビルでの出店では、商品は概ね完売状態となり、ショップでは、多くの和洋の関係者、教職員、卒業生や、連携企業であるジェイアール東日本の関連会社や地域市民の方々から声をかけられた。学生は、消費者である地域の人たちや企業との連携を経験し、自分たちの活動が社会とつながっていることを初めて実感し、「自信がついた」と感じていた。一方で、3年目は市川駅ビルの改修工事となり、同様のショップ経営が不可能となり「ネットショップ」を立ち上げたが、当初の計画ではなかったことや準備不足もあ

り、満足な売上げにはつなげることができなかった。しかし、この「売れない」体験も貴重な経験となった。ショップの広報の方法や「ネットショップ」で売れるための商品企画など、今後の課題も発見できた。

外部からの評価が高かった内容をみると、販売した商品の中に高評価を得た商品も多くあったが、それにも増して、このような取り組み自体に学内外の様々なところから高い評価を得ることができた。ワークショップでの集客状況も高く、ショッピングセンター運営会社からは、ショップの開店期間の終了後に再度の開催依頼まであった。学生だけでなく関わった教員も地域社会の中での学生の存在価値や評価を実感し、学生の新しい側面を観察することができる活動となり、今後の学生指導の上でも有意義であった。「学生と教員の連携」「学生に対する大学の支援」「大学と地域・企業との連携」など、大学、教員、学生が一体となって、学外に出て体験学習していることに外部からの評価が高かったのだと実感している。

学生からは、この活動に参加したことが就職活動に役に立った、家庭科教員免許取得や教員採用試験の合格につながったなどの声も聞かれ、PDCAサイクルを体験するこのような取り組みが家政学部の学生を成長させる1つの方法であることを検証することができたと考える。また、多くの地域社会・企業の方々、学内関係者、卒業生などとの連携が連鎖して引き起こり、教育的側面である学生教育に留まらず、大学（家政学部）の広報活動や学園の活性化にも役立つ貴重なプログラムであることも判明した。今後は、家政学部のプロジェクトとして継続させ、学生教育に活用していくとともに、主に服飾造形学科の学生や卒業生が参加する恒常的なショップ経営と「和洋ブランド」の誕生を目指したい。そのために、改めて大学の支援が得られるように、3年間、試行錯誤した体験を土台として、次の具体的プログラムを企画立案する予定である。

謝辞

本教育研究活動は、和洋女子大学教育振興支援助成に採択されご支援いただきました。家政学部の助手・助手補・卒業生スタッフの皆様には、学生と教員の活動を全面的にご支援いただきました。ここに記して感謝申し上げます。さらに、購買者としてこの活動を支えてくださいました学園・大学の教職員、後援会、同窓会、地域住民の皆様にも深く感謝いたします。

連携大学・企業の皆様

- ・千葉大学環境健康フィールド科学センター
- ・(株)ジェイアール東日本高架サービス・(株)ジェイアール東日本都市開発機構
- ・(有)ビー・アイ
- ・(株)和洋サービス
- ・島村菓子店・望月菓子店・タイヘイ(株)・ボーソー油脂(株)

活動へのご協力、ご支援をありがとうございました。

湊 久美子（和洋女子大学 全学教育センター 教授）
 嶋根 歌子（和洋女子大学 服飾造形学科 教授）
 塚本 和子（和洋女子大学 服飾造形学科 教授）
 向井加寿子（和洋女子大学 服飾造形学科 准教授）
 伊藤 瑞香（和洋女子大学 服飾造形学科 准教授）

織田奈緒子（和洋女子大学 服飾造形学科 助教）
藤澤由美子（和洋女子大学 健康栄養学科 教授）
登坂三紀夫（和洋女子大学 健康栄養学科 教授）
大河原悦子（和洋女子大学 健康栄養学科 准教授）
庄司 妃佐（和洋女子大学 家政福祉学科 教授）
佐藤 宏子（和洋女子大学 家政福祉学科 教授）
大石 恭子（和洋女子大学 家政福祉学科 准教授）
柴田 優子（和洋女子大学 家政福祉学科 助教）
柳澤 幸江（和洋女子大学 健康栄養学科 教授）

（2019年10月8日受理）